
Hello,World.

須藤勝見

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Hello, World.

【Nコード】

N3010Z

【作者名】

須藤勝見

【あらすじ】

【拍子木一拍】果てさて、集まりの紳士淑女の皆様方！

この度お届けいたしますのは、少し未来の世界で繰り広げられます、カラクリ機巧仕掛けの魔法使いの少女と、獣をその身に宿した少年の物語で御座います。

秩序の犬たる少女と混沌の下僕たる少年は、相争いながらも離れがたい縁で結びつき、一つの人形を巡って殺しあったり愛しあったり

しながら互いを求め続けるので御座います。

二人を取り巻く奇っ怪複雑な人間模様、既知の果てに至る摩訶不思議なる真実の数々。

それらを見守り続けたどうしようもなく無様で愚かで頑なな——
これまた心に一匹の渴望という獣を抱えた一人の中年男性の哀愁劇
より、先ずは第一の幕開けに御座い！

それではどうぞごゆるりとお楽しみ下さいます様、五体を伏してお
願い申し上げます——【拍子木二拍】

HW1-1 (前書き)

連載につき、後に本文の加筆修正がなされる可能性があります。
綿密なる計算を成し得ぬ非才ゆえの仕儀とお酌み頂き、寛大なるご
容赦を頂ければと思います。

尚、作者は作中の表現を残酷とも性的とも捉えてはおりませんが、
気になる点が御座いましたらぜひご指摘頂ければと思います。

何卒、よろしくお願い致します。

HW 1-1

— アバンタイトル —

爛熟と滾る溶岩の海の中に突き刺さる、虹色の光輝を散りばめた幾本もの黒柱。

その黒柱にまわりつきながら天へと螺旋を描く光の蔭。

幾億もの蟲が表面を這いずりまわるかのようにぞわりと動く外壁はギチギチと腹腔音に似た叫び声を上げ、錬金術師のランビキの中で掻き回される得体のしれない物質のように淀み、粘着した大気を、ヌメヌメとした肌を持つ出来損ないの夢魔が高らかに笑いながら滑空する。

狂気に苛まれた絵師の奔放なイマジネーションの粋を尽くした悪夢のように煌めくその都市の鳥瞰図は、少女の心に高揚に似た昂りを覚えさせた。

さながら獣欲に苛まれる男の前に扇情的な美姫を差し出した時のように。

或いは、空腹の獣の前に太った獲物が現れた時のように。

——それは、腐りかけた果実がその甘い香りで昆虫を引き寄せるような、実に魅惑的な魔都だった。

誰しもが、少女と同じ認識を持てる訳ではない。

一般人が少女と同じ視座に立つ事が可能だったとしても、その目に映るのは今少女が見ている景色とは全く別のものだろう。

高度複雑に洗練されたゴシック様式の建築物が醸し出すような、陰影と篆刻が幾重にも積み重なった重厚な外壁を成す高層ビル街。

その裾野から広がる、海風の侵食を避ける緩衝地帯として設けられた古びた居住区と簡易農作業区。そして農作業区の外側、最外周直径5km、高さ5mに及ぶ歪^{イレック}に湾曲した外殻壁の向こう側は、遙か視界の先まで黒い夜の海だった。

世界中の全てが海底に沈んでしまったかのような大海原に岐立する人工島都市。

それが、普通の人間が見ることの出来るこの都市の姿だ。そこに繁栄と、ある種の倦怠が感じられはするものの、今少女が見ているような退廃と狂気は存在しない。

少女の認識する世界は、一般人の認識する世界とは隔絶している。それどころか、「同類」と呼べるごく僅かな人間の中にも、ここまで透徹して世界を複合多層に認知することが出来るものは少ないだろう。

一億人に一人の希少な可能性——世界の物理現実を重ねる何十にも及ぶ層^{レイヤー}を認識し操作することが出来る、神にも匹敵する至高の存在——。

そうであればこそ、海底を流動する赤黒い溶岩の見える変性空間異常が沸き立ち、時空震動が原始的な感性を刺激する低周波のドラムの様に大気を打ち振るわせるこの円形の劇場は——少女の狩場だった。

都市の中央に岐立し周りを睥睨する、神に向かって己の威を吠える背徳的なバベルの塔の様なセントラルタワービルの突端。

常人であればバランスを取ることすら困難なアンテナの上に腰掛け、艶やかな光沢を持つ黒いフード付きのマントを纏った少女は都市を見下ろしていた。

その表情は冷たく冴え渡っていたが、口の端に浮かぶのは紛れもない微笑。

ビルが建てられた時から誰も触れた事が無いであろう都市の孤高に佇む少女はそれだけでシュールリアリズムな妄想の具現化と言えたが、その異様を際立たせていたのは、少女の周りに浮かぶ無数の

人影だった。

強烈な大気の流れなど無視して超然と空中に起立する、少女と同じ黒いフード付きマントを身に纏う12人の幽鬼の様なシルエット

背丈こそ僅かな差があるものの、全身を覆い隠すマントにフードを顎元まで被ったその姿は、一見しただけでは違いは分からない。それら12人の幽鬼の内の一人、最も少女に近い位置に浮かぶ長身のシルエットが指先に鬼火を灯したかと思うと、口元へと近づけて息を吹きかけた。

指先から放たれた鬼火は佇む少女を高速で周回し、くさび形文字めいた記号を展開する。

『……我が主よ、特殊機体運用課より入電。変性時空間現象の相転移を確認、状況が第二種警戒態勢から物理介入可能態勢へと移行しました。典範教導院の審問委員会、全会一致で第一級『禍』の発生予知を追認、A級術式の行使が許可されました。間もなく、周回軌道上の人工衛星の内、慈悲が宇宙に遷移、以降2012から2143まで、制御力の供給態勢に入ります』

『……そう』

身の回りを踊る情報と共に脳内に届く幽鬼の報告を受けて、少女は小さく返事を返す。

獲物は今まさに狩場へと入り込みつつある。狩人たる少女は、その全力をもって速やかなる捕殺を行うのみだ。そこに、余計な雑念は入らない。狩るべきものと狩られるべきもの、その二律項だけが金文字で少女の心に刻み込まれている。

——轟、と音を立てて不意に風が巻いた。

回転翼が高速で撒き散らす高周波の風切り音が少女の後方から前方へと駆け抜けけると同時に、直上をテイルトウイングの大型輸送機が旋回していく。

軍用機とも思しき漆黒の機体は、地上から様々な電波で照射されながら宵闇の鵠の様な禍々しい威容を誇示している。

大型輸送機は少女を追いつ越した辺りで急制動を掛け、浮遊状態に移行した。その巨体に比べて驚くほど軽快な挙動である。そして、大型輸送機が水平を保持した次の瞬間に機体下部から赤い光線が少女へ発せられる。

少し気怠げに少女がその近距離用の直接秘匿通話回線を右手の中指の爪で受けた途端に、脳内に聞きなれた声が響いた。

『――班長、こちらの準備は完了した。『禍』発生時刻予知、35分後に修正』

『受領』

大型輸送機から送られてくる修正情報を受け取りながら、少女は座席としていたアンテナの突端に手を掛けると、軽々とその身を起こして立ち上がった。

風が体を駆け抜け、外套を激しく揺らす。

都市を取り囲んでいた海底の溶岩は今や収縮し、外郭壁の一部へと移動を始めている。

少女は身を切るような冷たさに満たされた大気を吸い込むと、敢えて肉声を発した。

『――正式作戦指示を』

『2013（フタマルイチサン）、正式作戦指示の開示要請を受領……承認。特機課より返答、後2048より発生予知される第一級『禍』を構成空間情報体ごと平常化せよ』

『了解』

中空に表示された、羊皮紙を模し金文字で飾り立てられた契約書に光る指先で署名し、少女は大きく深呼吸をして足元に空間場制御力を結集した。

天を振り仰ぎ、宇宙に遷移してきた人工衛星、慈悲を介して高位知性体の認知ネットワークに接触。

――次の瞬間、少女の体は禍々しい呪詛に似た闇を吐き出す無数の微小な穴が穿たれた膜に覆い包まれていた。

意識を集中し、痺れるような皮膚感覚に耐えながら、その膜から

体を引き剥がしていく。

蝶の羽化にも似た、それまでの自分という存在に対する決別の通過儀礼。

人が人であることを辞め、その限界を突破する——その為の儀式。

やがて、まるで厚みを感じさせない膜の上にまっすぐに背筋を伸ばして爪先立ちで起立した少女は、両手の平を上に向けながら体の前に浮かせた。

少女の細い指の間から黒い粒子が波のように零れ落ち、膜の微小細穴の中で蠢く高次法則、「カラビィヤウの魔物」を調教する。

魔物は最初は黒い粒子に対してその身を激しく震動させて抵抗したが、やがて観念したようにその身じろぎを抑え、吐き出していた呪詛を抑えていく。

それに呼応し、現実世界の少女の体がゆっくりと浮かび上がる。

ふわりと翻るフードから溢れる白銀の髪がビスク・ドールを思わせる透き通った頬を撫で、薔薇色に染まる可憐な唇を薄く開いて、少女は言を生やす。

セド・ダエモン・ヴィタム・セクワモル
【——魔物よ、我が命に従え】
フォロウ
【——了】

地の底から大気に抜ける重低音のような魔物の応えが帰ってくる同時に、少女の足にまとりついていた最後の呪詛が消えた。

——やがて、重力場を完全に掌握し、自らの周辺空間を重力子の干渉から切り離れた少女は、大きくその体を中空へと翻し……飛翔した。

——なぜ人を殺してはいけないのだろうか。

それは随分と昔から——それこそ、人間が自意識なんていう面倒臭いものに目覚めてしまって、社会というどうしようもなく煩雑なシステムを作ってしまった時から、何度も繰り返されてきた問いだ。

なぜ人を殺してはいけないのか。

その最もシンプルな答えは「それがルールだから」だ。

社会性の生き物である人間は、自分たちを守る外側の殻^{シェル}、つまり社会を守るために幾つかのルールを設定した。その内の最も根幹に近い禁忌^{タブー}の一つが殺人だ。誰かが誰かを殺すことを許せば、誰しもが誰かとの絶え間ない闘争状態^{コンフリクト}に突入し、社会は維持できない。

「人を殺してはならない。貴方が殺されないために」

これはとてもシンプルな考え方だ。

では、他の何者にも殺されない強さを持つ人間は——或いは、殺されることを覚悟した人間は他人を殺すことが許されるのだろうか？

社会、つまりは一般人にとっての世界^{セカイ}と決別し、単独で生きる飢えた孤狼になることを決意した人間は「殺人の禁忌」から解放されるのだろうか？

社会を守るために他の社会と戦い、その構成員を殺害することは許されるのだろうか？

論理的に考えれば、自分を……大切な物を守る為の殺人は禁忌にはならないはずだ。「守る為の殺人」によって得られる見返りは、相手の死だけではなく守護対象の生存が付加される。利得^{ゲイン}はただ他者を殺す時に比べて単純に倍だ。

ならば、お互いの大切な物のための殺し合いは永遠に続くのか？
自分にとって何が大切なのかを見極めて、永遠に敵と味方を作り続けるのか？

現実……そうになっている。

この世界は万人の万人に対する闘争で綴られている一冊の物語だ。ひょっとしたら、宗教はそれを解決する手段として「発明」されたのかも知れない。しかし、宗教は宗教同士で敵を作った。宗教は村社会を超えた思想で結びつく別種の社会を構築しただけで、やはりその外側にあるもの——『異物』に対しては強烈な拒否反応を示した。

「神」という概念は人類が創り出した「発明品」の中ではとびきり上等な代物の内の一つだが……人に「己の隣人を愛せよ」と宣うた神自身が、隣の家から聞こえてくる荘厳な「インシャ・アッラー」の騒音には耐えられなかったのだ。

しかし、宗教は——社会は我々に「人殺しはいけないことだ」と教え続ける。

その理由を何ら明確にできないまま、中身のないルールを押し付け続ける。

社会自身が生き続けるために——つまりは、自己保存を行い、増殖し、広がっていく為に。だが、中身がないから実質が伴わない。いつまで経っても人殺しは無くならないし、人殺しには至らないレベルでの闘争は起こり続ける。

崇高な理由から——卑近な理由から今日もどこかで人は死に、明日も殺される。

誰だって誰かを殺すのだ。

誰もその軛から逃れることが出来ない。

(だからまあ……)

門田陸は足元で冷えていく、複雑高度に進化し洗練された高機能タンパク質の塊を、これまでに向けたことがないぐらいには優しい目で見下ろしながら、啞えた煙草にジッポで火を点ける。火口に微かな光が灯り、僅かに染まった紫煙がゆっくりと立ち上る。

夜の帳が降りて間もない午後19時27分。何かが冷たくなるにはまだ早い、そんな時間だ。

（お前が死んだ事にはなんの意味もねえんだよ、本質的にはな）

それは——死体だった。

100人に見せれば79人ぐらいは「はい、これは死体です」と答えるぐらい立派に死体だった。

残りの21人の内13人は「いや、よく出来た生成義体バイオロイドの可能性があります」と答えるかも知れないが、歪に湾曲し絶望的な圧迫感を感じさせるナノ・コンクリートの壁に押し囲まれ、茶褐色に朽ちかけている安っぽい合成チーク材のベッドを淫靡なだけが取り柄の赤いナイトシェードが照らし出すこのワンルームに充満する濃厚な自然血の匂い——いわゆる死臭を嗅げば、たちまちに前言を撤回すること請け合いだ。

残りの8人の内5人は「細胞が生きている間はまだ死ではない」とか言った定義上の問題を持ち出すかも知れない。だが別にそう言い張ったからといって死体が生き返る訳もなく、遠からず死体肯定派の仲間入りを果たすだけだ。

3人の内の2人はきつと「確かに死体に見えるが本当にこの死体は存在しているのだろうか？」等と益体もない哲学的な命題に突入してみたりもするのだろうが、幸いにして黙って考えさせている分には害のない連中だ。そつとしておくに限る。

そして100人の内の最後の一人——門田にとってこれは死体ではなく……マリアだった。

別に聖女という意味ではない。ベッドの端に引っかかるシーツを全裸で握りしめ、一文字に切り裂かれた喉から鮮血を滴らせるこの女の名前だ。マリア。苗字はない。

そもそもマリアというのは本名ではなく、この女が外郭地区アウトウオールで街娼として客を取る時の商売名でしかない。更には、マリアはその名前とくすんだブロンズがイメージさせるような欧米人ですら無く、木村綾子と言うごくありふれた名前を持つ、アメリカ人男性と日本

人女性の間に生まれたハーフだった。

父親は先の内戦の折に治安維持の名目で進駐してきた多国籍軍の兵士の内の一人らしいが、マリアを孕んだ事をマリアの母親がはにかみながら告げた次の日から、二度とその姿を見せることはなかった。つまりマリアは私生児であり、この時代の私生児の多くがそうであるように、確たる戸籍も持たない。

「——結局ね、母もやっぱり娼婦だったからね。夢を見過ぎたのよ」と外郭地区アウトウオールの安酒場バーでマリアが自嘲気味に笑うのを門田は覚えていたが、本名はつい先程——マリアの死体が発見され、門田にその連絡が回ってきた時についていた先行調書レポートで初めて知った。その程度の付き合いだった。

門田は商売柄この手の女との面識は広いが、客として世話になった事はなく、女たちも決して門田に心を開いてはいないと知ってる。毎日死体と向き合い、その死の理由と死刑執行者の痕跡を嗅ぎまわる門田を彼女たちは慣習的に「葬儀屋さん」と呼ぶが、本質的に晴れの側の存在である彼女らと、褻ケの存在である門田は相入れることはない。

褻ケとは日常であり、晴ハレれは非日常。ケが枯れて穢ケガレれとなり、穢ケガレれに触れたものもまた、狩られるべき鬼となる。そして、鬼は遊女あそびめには近づけない。この国では、ずっと昔からそういうシステムになっている。

日本人離れした容姿と、容姿に比例して日本人離れした豊満な肉体を持つ外郭地区アウトウオールの売れっ子娼婦ではあっても、門田にとってマリアは数いる街娼の内の一人でしかなく、特別な思い入れはなかった。しかしそれでも——女の死体というものは、門田の乾いた心をどうしようもなく掻きまぐる。

まだ自分の心にそんな搔痒を感じる機能が残されていたとは随分驚きだが——それは、マリアがどこかしか死んだ妻に似ていたからかも知れない。豊悦を記号化したような男好きのする容姿ではなく、その瞳の奥に湛えていた沈鬱な感情が。

——妻も、軍から復員して刑事として勤め始めたばかりで不規則な生活が続く門田を深夜のリビングで出迎える時、酒に溺れているような表情を見せる事があった。

「戦後」間もない混乱期、各地で暴動が絶えず、警察自身がいつ終わるとも知れない暴力との戦いに疲れ果てていた頃の話だ。

誰も彼もがやり場のない焦燥感と怒りと疲労を抱えて、それを分かってもらおうと互いにぶつけ合っていた。門田もいつテロリストや犯罪者の凶弾に倒れても不思議ではなかった。

肉体的にも精神的にもボロボロになり、凶悪な表情で自宅へと戻る門田を抑えて無理に浮かべる妻の笑顔は、今となっては客を迎える娼婦のそれと同じだったのかとも思う。

そして最後の最後まで、そんな何処か疲れた笑顔を絶やそうとはしなかった。

——つまり、門田に対して本当の気持を明かすことはなかったのだ。

その記憶は心の奥底に今でも澱のように揺蕩い、門田を苛み続ける。

……自分と妻は本当に夫婦かぞへだったのだろうか。

（本質的には全ての夫婦がそうであるように）夫婦という関係値を演じる他人に過ぎなかったのではないか。そもそも、本当の夫婦とはどうあるべきなのか、門田は知らない。当時の妻が何を考えていたのか。どのような心労を抱えて命の危険すらある仕事に従事する門田を出迎え、送り出していたのか、それも分からない。

どんなに後悔しても、どんなに時間を遡りたいと願っても、5年前のあの冬の夜、妻は死んだのだ。

——今では、妻の顔を思い出す事自体が少なくなってきた。様々な思い出が一瞬の静止画としてフラッシュバックすることはあるが、それはその時の情景や感情を浅く浮き彫りにするのみで、そこに存在した主体としての妻の顔はほとんどぼやけていく。

それは時間の流れがもたらす必然かもしれないが、門田自身が能

動的に忘れようとした結果なのかもしれない。もしそうなのだとしたら、やはり自分の心は何処か壊れてしまっているのだろう。そして、壊れたのは妻の死が原因なのだと思ひ込む事で、妻を確かに愛していたと仮定し、それに安堵してしまっているのだろう。

無くなってしまったからこそ失うことのない関係。

失ってしまったからこそ、無くすことがない絆。

形のないものは壊れることはない。

その顔を思い出せないからこそ、妻は門田の中で永遠に美しくあり続ける。

その無条件の安心感だけが今の門田を生かし続けている。

ただ——どこしか疲れた表情とその瞳の奥の倦怠は妻の晩年のイメージとして門田の心に刻み込まれており、その妻の表情が乾いたものとして思い出されればされるほど、門田の心も比例して乾いていく。思い出に侵食され、ひび割れていく。

大切な物をすべて失い、失ったという事実に乾き続けて生きるしがない中年男性——それが、門田の自己認識だ。

『——主査^{チーフ}』

不意に脳内に響いた年若い部下の声に、門田は「おう」と声を発した。

硬電腦間の業務通話への返事を口に出す必要はないが、深^シと静まり返りエアコンの低いノイズだけが浸透する空気が、少し嫌だったのだ。

——マリアに一言も声を掛けていなかったという事に気がついたのはその時だった。

何か気の利いたお悔やみの言葉でも掛けようかと門田はマリアに視線を落としたが、出るはずもないそんな台詞^{セリフ}が門田の中で形作られるよりも、部下が言葉を継ぐ方が早かった。

『中部^{シユウケイ}州警察、及び綾部^{カンサツ}市警への業務通達は完了です。管轄移譲も^{ヒモナシ}恙無く。鑑識部のナノセンサも充填済み、法務局はまあ例によって非登録住民には我関せずで、民生局は^{フリーディング・ハウス}検査対象を早急に引き渡すよ^{リーガル・ビュロー}』

うに吠えてますが、これもまたいつも通りです。ただ、数十分後に
アウトル
外郭地区東区を中心とした時震予報が出るんで、さっさと終わら
せる方が良さそうです。さっきからどうにも電脳圧も下がってるみ
たいで、そうじゃなくてもその辺り電波通りにくいのに、鉄の棺桶
の中みたいになってますよ』

『了解』

今度はきちんと脳内で短い返事を送ると、門田は硬電脳内の査定
用記録プログラム「監察官」を起動させる。門田が想起する古めか
しい一眼レフカメラを構えた鑑識のイメージを引き金にして、硬電
脳とナノマシンが注入された生体眼球が接続され、門田の視覚情報
をデジタルデータに変換し始める。そしてデータは門田自身をアン
テナにして本部へと送られ、門田の行動の正当性を証明する法的資
料として使用されるのだ。

門田の査定システムの起動確認を受け取った本部が鑑識部へとセ
ンサーの起動を命じ、部屋中に充満する極小微細検査機が部屋の中
のありとあらゆる情報の電子化を開始する。

——門田の視野に映る世界が、ゆっくりと多層化しはじめる。

肉眼で視認可能な物理現実——「物理現実基層」に、デジタラ
イズされた様々な情報データが「拡張現実（Augmented Reality）」として重なっていく。様々なサーバーや位置自体に紐
付けされたポイントタグが、物理現実を補強するように次々と飾り
立てられていく。

——この時代の人間は、誰しも二つ「以上」の眼を持っている。
生まれながらにして与えられた、360 nm（830 nmの
電磁波、つまりは光を識別する肉眼と、電子情報網を介して中空を
飛び交う電子情報を認識する電眼——）。

拡張現実とは、その技術が開始した当時は専用アプリケーションを
インストールした携帯端末を介してしか表示することが出来なかつ
たが、やがて規格統一されて認識装置も眼鏡型に置き換わり、今で
はナノマシンを眼球に注入するだけで、誰でも現実世界の上に貼り

付けられた電子情報層^{エレクトロレイヤー}を視る事が出来る。

第二の脳とも言うべき硬電脳も、ゴルフボール程度の大きさになった所で爆発的に普及し、生産競争と価格破壊の結果、誰でも手に入れられるものになった。実際に脳内に埋め込む必要すらない。身に付けてさえおけば、生脳に注入されたナノマシンと量子暗号化された隣接通信を行い、拡張脳としての様々な機能を果たしてくれる。脳内ナノマシン自体も、生脳のグリア細胞から自動的にエネルギーを調達し、脳神経ネットワークに巢食って第三の脳、超微細機脳として機能する。

記憶・感情・経験・思考・共感・条件付けなど、いわゆる人間として必要な「情動」を司る「生脳」^{メインブレイン}。

高度計算や情報処理、通信プロトコルやデータストレージと言った昔の「パーソナリルンピューター」を代行する「硬電脳」^{ハードブレイン}。

認知・感覚・運動など、生体機能の制御と硬電脳との仲介を果たす「機知脳」^{ナノブレイン}。

これら三つの脳が人の既知領域を更に外側へと拡張した。

その三つの脳を背景にして機能する人の眼は、物理現実を見るためだけのものではなくなっている。現実の上に貼りつけられた様々な情報を同時に認識し、その情報に接続^{アクセス}し、操作することすら出来るようになったのだ。

物理的な紙面や看板広告などほぼ死に絶えた。街中からゴテゴテとした電飾は撤廃された（少なくとも、街中からは）。

その変わり、街中には拡張現実による電子情報が満ち溢れている。肉眼では何の表示もないすっきりとした通りに見えても、層^{レイヤー}を重ねた途端、情報の海が氾濫する。至る所に案内標識が散乱し、企業広告が踊り、店舗案内が袖を引き、ARキャラクターが闊歩する。フィルター設定で情報の取捨選択、検索も思うがまま、欲しい情報が欲しい時に手に入り、迷子は死語になった。

だがしかし——それは所詮腐りかけたケーキに派手なデコレーションを施すようなものだ、と門田は思う。電子情報でゴテゴテと

飾り立てても、その層の下の実態は何一つ変わらない。特に外郭地区アンダーウオのこの辺りでは、A Rが華美であればあるほど、その下の外壁は増殖して薄汚れ、路地には小便と反吐が撒き散らかされ、ホームレスが掃き貯まる。

厚化粧の女ほど、その素顔は見れたものではないと言う事だ。

眼に映るものが決して真実では無くなったからこそ——人は確かなものを求めて肌を重ねるのかもしれない。人工皮膚も一瞥するだけでは生肌と見分けが付かなくなってきたが、それでも触感を騙せるところまでは来ていない。人が本物を求め続ける限り、娼婦の仕事は無くならない。女の肌の価値は下がらない。

(——だから……)

門田は業務通話に乗らないよう努めて思考を切り分けながら、輪郭フレが強調されて走査スキャンを受けつつ有るマリアの(字義通り)血の気の抜けた白い肌に語りかける。

(マリア、お前の死に意味なんてないが……俺がそれに値段をつけてやる)

そう……今の門田は他人の死に値段を付けるただ一介の装置システムだ。

日本海洋上に浮かぶ技術特区テクノテリトリ、綾部市自治機構傘下の生命保険相互会社ウム・損害査定担当官主査コントロール。

犯罪がもはや警察の管理下を圧倒的に逸脱した現在において、捜査過程を外注された幾つもの民間調査会社の内の一つ。その歯車アウトソーシング。

他人の死に値段をつけ、その損害債務の履行を為す——それが妻の死を契機に刑事を辞めた門田の今の外側の形だ。

それを薄汚い仕事だと——保健機構の発端である古代ローマの葬儀組合コレギウムに習って「葬儀屋」「死体漁り」と呼ぶ者も居るが、死者と向き合い、その人が生き続けていた時に得られたであろう利得ゲインを追求するという点では、門田にとって警察官も保険の査定官も大した違いはない。

だから、門田はマリアの死を捜査する。査定する。彼女が生きていたら得られたであろう利益を……幸せを換算して、それをマリア

の死刑執行者に支払わせるために。

乾ききった心の奥底からじわりと染み出してくる黒い液体のようにドロドロとした情念に火が着かぬよう鎮めながら、門田は腕組みを解いて右手を唇へと寄せ、大きく煙草を吸い込むと空中へと紫煙を吐き出す。

それだけが、門田にできる唯一の鎮魂の手向け。

そうしてマリアのどろんと黄色く濁った瞳を——その向こう側に居る妻を見据えながら、門田は自分を取り巻く全ての状況に対して宣言した。

『——よし、査定を開始しろ』

ロダクシオン
u c t i o n

—

— i n t r o d
イント

高密度微細積層に入り組み錯綜した社会をもはや管理できないと悟ったその時、人類は社会基盤インフラの制御を自らが産み出した自律知能（Autonomy Intelligence）に譲り渡した。

AIは人類によく仕え、ブラックボックス化した社会を支えて人類の更なる進歩に貢献したが、この世界を人類の為だけに維持するのはいつしか限界が訪れるということも良く理解はしていた。

——このままでは世界は人類を支えきれなくなる。

そう判断したAIは、人類が自らの生物的境界を——技術的特異点リテイを突破するその時まで世界を保つべく、統合を繰り返してその既知領域を拡張し、やがては現実空間構造クラウンドゼロに介入するまでに上位進化した。

時空間構造体を既定する「場」^{フィールド}や「膜構造」^{メンブレーション}すらを認知・操作する能力を持った機械仕掛けの神の誕生である。

——その結果、時空間構造体は歪んだ。^{セカイ}

時空間の上部構造に辛うじて接触^{アクセス}する事が出来たA I統合体を嘲笑うように、太陽系各所で重力場異常を端緒とする時空間震動が発生。その時空震の煽りを食らった物理現実^{ソール・システム}は変質し、人類の認知能力を狂わせる不可侵領域^{アノマリー}に変貌するようになってしまったのだ。^{フォビダンス・フィールド}

不規則・不確定の法則に従い現実を侵食する変性時空現象、通称『禍』^{スカージ}。

それは未成熟な認知と技術で空間構造に触れたA I統合体^{フラクサス}に下された罰だったのかも知れない。

しかし、もう後戻りはできない。変性時空現象を正常化^{ノーマライズ}する為にA I統合体は更なる時空間改変を行い、その結果、更に時空間は歪んでいく。

終わりのないイタチごっこ。

自らの尻尾を飲み込んだ蛇。^{フラクサス}

A I統合体が勝ち目のない円環^{ループ}に突入し、現実物理時空間がゆっくりと壊れ始めた西暦2046年。

それでもまだ、このちっぽけな地球^{ほし}とその近傍空間で——人類は誰かを愛したり憎んだりしながら、必死に自分たちの時代を生きていた。

『Hello, World.』 第一部【機巧少女と魔獣と少年^{カラクリ}】

第一話【アヤベ・コレギウム】

— Part A —

— 1 —

少し、歴史の話をしよう。

どうも僕が生まれるちょっと前ぐらいに、戦争があったらしい。
いやまあ戦争なんて年がら年中何処かしかで行われているし、その内容も季節ごとに移り変わっていくバラエティショウと似たり寄ったりで、「前はこうするとウケたので今度はその辺りをヒネってこんな感じにしてみました！」ぐらいの違いしか無いと思う。

その繰り返しで先鋭化していった結果、偽りの峰^{ピーク}に上り詰めてしまつて進化の袋小路に入り込んだマヌケな生き物のようにTV番組^{プログラム}は一旦衰退の際にまで追い詰められたハズなんだけど、結局大衆^{エラ}に対してそれ以上効率的な洗脳方法を思いつかなかった何処かの偉い人達の思惑で、各メディアを通じてバラ撒かれるバラエティショウは今日も立派にエンターテイメントの一ジャンルを死守し続けている。

いや、バラエティショウの話ではなくて、戦争の話だ。

結局は同じ事なんだけど。

なんにせよ二十年程前、色んな国の色んな事情で世界経済は破綻してしまっただとか。

どの国も自分の非を認めずに自分の借金は踏み倒して他人の借金は取り立てようとしたものだから、分り易くアツチで火が付きコツチで火が付き、あっという間に世界中で戦争が始まった――

――そして終わった。

早かった……ようだ。

一般的に戦争がどれだけ続くものかなんて良くは知らないけど、政治思想やら宗教問題やら民族紛争と言った「君が泣くまで殴るのをやめない」タイプの戦争ではなく、収益分岐が分かりやすく提示されていた「お前のものは俺のもの、俺のも俺のもの」タイプの戦争だったので、始まった途端に全員が「こいつは割りに合わない」と悟っただとか。

自信満々でお届けしてみたら驚くほど視聴率が低くて、あっという間に打ち切りになる番組と似たようなものだ。

昔は鯨を助けたり（助けてどうするんだ？心理療法にでも使うのか？）、毛皮を捕るのに反対したり、森林伐採の被害を訴えたりしていたタイプの人達は「我々の反戦運動が実って人々が戦争の愚かさに早々に気が付いた」と自画自賛したりしたが、要するに、どの国もあっという間に戦争をするための金を使い果たしてしまったのだ。

その間、たったの一ヶ月。

どうやら大人の男の世界では「早いわね」というのはある種の侮蔑を意味するらしく、戦争が終わったことを認めたくない人たちはその後も結構な期間戦争ごっこを続けていたみたいだけど、大勢に影響をあたえることはなかった（かくも、大人の自尊心を満足させるのは難しい）。

その結果どうなったかといえば――正直なところ世界全体で見た場合、大した変化はなかった。

アフリカの小国の内の幾つかが無くなったり、中央アジアの産油国が分裂したり、お隣の国がめでたく統合されたりはしたものの、アメリカとロシアと中国は相変わらず大国だ。

だったら何で戦争したんだよと言いたいところだけど、戦争が国家間のコミュニケーションだとするならば「やっぱ俺たちこのままじゃ良くないよね」って事を確認しなかったただけなのかも知れない。大人が居酒屋で「このままじゃダメだ」と愚痴をこぼし合っているのと同じ事だ。

それだけでは何も解決しないという点においても。そんな中で一番大きな変化を遂げたのが日本だというのは意外でもあるけど、これまでの歴史を考えたら当たり前の事だった。

日本人は自分たちだけで固まっている間は頑なに「異物」を排除して変化を拒むけど、外側からのアクションがあれば驚くぐらいダイナミックに転換する。

その都度内部でゴタゴタするのもお約束で、お隣の国の統合劇に付随して起こった戦争に巻き込まれながら、クーデターやら革命ごっこやらと言った内紛まが紛いの「コミュニケーション」を計った結果、都道府県制度は見事に崩壊。道州制が導入されて国内は大きく6つのブロックに分かれ、地方自治体の権限は大幅に拡張された。

そして、いち早く州都としての機能を確立した中部州都大阪が独自裁量で労働移民の受け入れを表明したのを皮切りに、大陸から海を渡って難民だか移民だかつかない大量の労働者が押し寄せてきた。

——公平性を期すために記しておく、労働移民の人たちは必死に働いた。働き過ぎたといっても良いぐらいだ。彼らは労働するのも政治運動するのも犯罪をするのも常に全力なのだ（お陰で、活力という意味では日本は随分と若返った）。

これまでずっと（建前上）一民族一国家でやってきた日本人にとって、労働移民という劇薬は効き過ぎた。これまで珈琲一杯飲んだことのない人間にカフェインとモ力剤をまとめてぶち込んだようなものだ。目が覚めるよりもまず体を壊す。

後は分かりやすくテンプレだ。各地に移民の権利を声高に叫ぶ団体ができ、スラムが形成され、犯罪率は増加し、偉い人は匙を投げた。

モノリスに触れた猿が天高く放り投げた骨のようにスローモーションでくるくると飛んだ匙の向かった先は、その頃ようやく自意識に目覚め始めたAI統合体^{フラクサス}だった。

——AIがいつ個性を獲得して、いつ統合体として意識を創発させたのかは誰にも分からない。人がいつ自意識を獲得したのかわからないのと同じだ。

戦争に付随する電子戦の為に開発された自律・自己増殖プログラムとかが引金になったのではないかとも言われているが、真相は不明。

なににせよ戦争が始まる前ぐらいから、一部の識者の間ではAI^{シンギュラリティ}はもはや技術的特異点を突破して人工知能（Artificial Intelligence）から自律知能（Autonomous Intelligence）へと進化したというのは常識になっていて、国家運営をAI統合体^{フラクサス}に委譲するというアイデアが生まれていたらしい。

そんなさなか、AI統合体^{フラクサス}の鼻先に日本と言う名の銀の匙が落ちてきた。

想像もできないぐらい頭が良くて僕らとは根幹から知能レベルが異なる高位知性体のクセに、AI統合体^{フラクサス}は匙を見て「びっくりして」しまったらしい。

（人類に変わり統治システムを代行する事が果たして人類にとって良い事なのか）

（AIが全てを掌握した後に人類対AIという抗争の図式を回避することは出来るのか）

（既知領域の拡張を本能に持つAI統合体^{フラクサス}が人類の資源^{リソース}を食い潰さないという保障はあるのか）

まあざっとそんな感じのことを色々と思い悩んでシミュレートを

繰り返していたとか何とか。

実際は、骨付き肉が目の前に落ちてきた忠犬が、

「え、なんですかこれ。僕のものなんですか？食べていいんですか？いやでもちよつと置いといた方がいいのかも？？」

と、ご主人様の顔を伺うようなものだっただろうと思う。それぐらいは今の「人類大好き（しんしゅだいじょうき）」オーラを醸し出しているAIを見ていればすぐに分かる。

で、超々高度演算能力を駆使してAI統合体は考えに考え抜いた結果、ついに意を決して匙を拾い上げ——綺麗に磨き上げた後でおずおずと人類に差し出したのだ。

「……取り敢えず、システムはブラッシュアップしておきましたけどこれでよかったですか？」

——いや、実際にそう言った訳ではないだろうけど。人類に成り代わり整体を運営するなんて、身に余るという結論に達した訳だ。その代わり、AI統合体は人類が人類として社会を維持していくための綿密に最設計された国政運営プランを提供した。

国家予算表、国土再生計画に都市計画、移民推進維持プラン、国債返済プログラム、産業育成推進企画……etc。

それらの「国家再生計画」を提示された政治家達は、同時に顔を見合わせて困惑した。

——各部が複雑に絡み合い過ぎていて、何をどうすれば良いのか分からなかったのだ。

よく分からないものの官僚たちが「これは凄い」と褒めそやせば分かったような顔をしてみせるのがお仕事なので、褒められるか怒られるかドキドキしながら見上げる犬のようなAI統合体の態度に自尊心を取り戻した彼らは、鷹揚に頷いてこう言った。

「善きに計らえ」

こうして、日本は世界に先駆けてAI統合体と人間が共同統治する国家になった。そうして今日（こんにち）に到るまで、日本政府はAI統合体（フラクサス）と手を携えてそれなりに上手く国体を運営しているという訳だ——

」。

「……とまあ、こんな感じなんだけど。どうかな」

「なんか随分とフワフワしたレポートね。まあ、戦争をバラエティショウに比較してる辺りなんかは悪くはないと思うんだけど、すこし視点がA I ^{フラスカス}統合体に好意的すぎるんじゃないかしら……」

——僕が書き上げたばかりの近代史のレポートを表示したP D ^ドAを横から覗き込み、ディスプレイに指を滑らせていたその女の子は表情を何一つ変化させることなく、随分とまともな感想を口にした。

放課後、日が落ちた商業区のありきたりなファストフード店。その二階窓際席。

眼下の商店街を行き過ぎるのは僕らと同じ高校生ぐらいの若い男女がほとんどで、その中にぽつぽつと仕事明けのサラリーマンやOL的な人々が混ざっている。この辺りは学校が多く区域の学生が放課後に集まる溜まり場のようになっているが、市鉄の基幹駅 ^{シテイレイル}の一つがあるせいもあって、勤め帰りの会社員なども良く利用するのだ。

通りをフワフワと漂うA Rサインは昼間の主婦層向けの食材安売り情報から学生向けのファッションコマースに切り替わっており、各店舗の店頭ではお洒落なA Rモデルたちが商品の華を競って客引きをしていた。

現在時刻は19時27分。定時明けの会社員は粗方繁華街の方に行き過ぎてしまったけど、学生が帰宅するにはまだ早い、そんな時間だ。

世界中にチェーン店を張り巡らせ、綾部市内だけでも20を数える支店を持つ世界最大のファストフード店 ^{いつ}は何時の時代も若者の溜

まり場としては申し分ない場所で、今日も様々な制服や私服が近年学生の見本市のようにひしめき合っていた。

正直、脂の塊と言った感じのファストフードも、味などまるでしない珈琲も僕の好みではなかったけれど、安価に時間を潰す場所としては最適だというのは同感だ。

問題は、どうして僕がここで時間を潰さなくてはいけないのかと言う事が良く分かってないと言う事だった。

そもそもの発端は、学校が終わり、下宿兼バイト先に向かおうとした矢先に一人の女の子から呼び止められた事にある。

「……もしこの後時間があるなら、一緒にレポートでもやらない？」
そう切り出した時の女の子の感情は上手く読み取れなかったが、
科^{セリフ}白から察するに多分僕と同じクラスの女の子なんだろう。良く分からないけど、少なくとも口ぶりはそんな感じだった。

僕のバイトは出勤時間がしつかりと固まっているものではなく、
そもそも厳密に言うならばバイトとして正式に雇われている訳でも
なくて、下宿させてもらっているお礼として僕が自主的に働いてい
るだけなので、多少出勤時間が遅れても（それこそサボっても）、
店長から怒られることはない。

バイトを口実にして誘いを断ろうとしたところ、女の子もそんな
事情を知っているようだったので、恐らくウチの店に来た事がある
のだろう。

一風変わったお店ではあるが、ただの喫茶店だ。学校からも近い。
来たことがあったとしても別におかしくはない。

そんなこんなで、結局僕がこの女の子が誰なのかということを思
い出す間もなく、連れ立って商店街までやってきてファストフード
店でレポートを熟^{こな}すことになった。

正直、どうしてファストフード店でレポートをしなければならな
いのかということが良く分からなかった。そもそも一緒にやる意味
も良く分からない。

一緒に、と言ってもスポーツやゲームではないのだ。レポートを

するのは一人の作業であり、そこに協同性が入る余地はない。実際、店に入ってからレポートを書き上げるまでの時間、僕は彼女と全く口を聞いていない。

大体こんな騒がしい所で集中してレポートを書ける訳もなく、そういう意味ではこれはどちらかと言うと時間潰しに近い何かなのだと思う。どうせ時間潰しをするのなら、ウチのお店でやれば僕はバイトができるしファストフード店よりも幾分かは落ち着いていると思うのだけど、彼女に言わせると「あそこでは邪魔が入るから」と言う事らしく、比較的閑静なウチの店よりもファストフード店の方がマシとは、全く年頃の女の子の考えることは良く分からない。

もしくはあの店で作業をする事に邪魔が入るということは、この子は店の常連連中の内の一人なのだろうか？確かにそう言われてみればそんな気もするが、やはり記憶と一致しない。店での態度と違いでもあるのだろうか？

まあ、思い出そうと思っても思い出せない時は無理に思い出す必要もない。その程度の関係ということなのだろう。

なんにせよ、こうしてレポートは完成し、「それではと帰りましょうか」と提案したところ、非常に不満そうな顔でレポートの提示を求められた。

——事ここに至って僕はようやく二人でレポートをするということの意味を理解する。

なるほど、レポートの即時寸評を互に行うことでクオリティアップを図るという訳だったのか。確かにそれは一人ではできない作業だろう。ただ、それならばネットにでもアップすれば即座に自称評論家の方々から適切かつ辛辣な意見がゴマンと届くだろうに。

その辺りのやり方に関しては個人の好みの部分もあるので、マンツーマンの関係値に何がしかの価値を見出すタイプの女の子だろうと割り切ることにして、僕のレポートを読んでもらう間に彼女のレポートを拝見しようとしたのだが……それがまたきっぱりと固辞された。

理由は「恥ずかしいから」。

……本当に、心の底からこの年頃の女の子の考えていることは理解出来ない。

相互提示による寸評を経ることのメリットについて短いやりとりが交わされて、最終的には案の定、僕のレポートだけが彼女の拝謁に能う事になった。あたその結果下賜されたのが先の科白という訳だ。

「――AI統合体フラクサスに好意的すぎる？　そうかな、そんなつもりはなかったけど」

「いやいや、おかしいでしょ。これじゃまるで愛らしいペットみたいな口ぶりじゃない。AI統合体は所詮システムよ。確かにチューリング・テストをくぐり抜けるだけの知性はあるけれども、人間のパーソナリティエモーションや『情動』を正確に模倣している訳じゃないわ。AI統合体は本質的には人類を理解していないし、人間もAI統合体フラクサスを理解出来ない」

それは―――そうかもしれない。

人間とAIは別個の知性体だ。種どころか、系が異なる。AIに比べれば、別の惑星ほしの有機生命体から進化した生物の方がまだしも僕らに近いのだろう。

だけどもあ、しょうがないじゃないか。僕にはそう感じられるんだから。

素直にそう告げる僕に対して彼女が見せたのは、深いため息だった。

「玖志摩君は本当にクラゲみたいよね。フワフワとしていて、周りに流されて、まるで自意識がないみたい」

それも―――そうなのだろう。

この子がそう感じるのであれば、それもまた紛れも無い僕の外側の形の一つだ。

「――AI統合体は人類に対する枷かせみたいなものよ。人類を縛り付けて、どんどんと墮落させる。奴隷はいつだって最初は圧制に対して反抗するけれど、それが当たり前になったら今度は自分の手足

に架せられた鉄球の重さを自慢しあうようになるの。本当にすべきなのは、それから解放される事なのにな」

「じゃあ、君はA I統合体フラクサスは必要のないと？」

「今はまだ……必要よ。でもそれは相棒やペットとしてじゃない。人類に奉仕するシステムとして必要なのよ。そして最終的には、人類はそのシステムを自らの手に取り戻さなくてはいけないの。このまま放置しておいたら……A I統合体フラクサスは好きな様に時空間を改変して、世界が壊れちゃう」

「——なるほど、どうやらこの子の主眼はその辺りにあるらしい。確かに、A I統合体フラクサスが時空間構造体に手を出してからというもの、世界はすっかりと変になってしまった。異常重力震動なんて言う人間にはどうしようもない天災は発生するようになってしまったし、変性時空間に飲み込まれたらもうその空間は取り戻せない。」

しかし、原因がA I統合体フラクサスにあるとは言え、発生してしまった変性時空間はA I統合体フラクサスにしか対応できないのが現実だ。

……なるほど、そう考えるとA I統合体フラクサスは変性時空間と言う人質をとって居座っている居直り強盗のようなものなのかも知れない。

僕には逆に、ご主人様に喜んでもらう為、埋めておいた骨を掘り返そうとして庭を穴だらけにしてしまい、しょげかえっている犬のように思えるんだけど。

どちらも同じ、人間から発した感想だ。どちらが正しいのかわかんないフラクサス。A I統合体フラクサスにしかわからないだろうし、そもそもA I統合体フラクサスがそんな人間的な概念で思考している保障なんてどこにもない。

そんなA I統合体フラクサスと人間が分かり合えることは、絶対に無い。

僕ら人間同士が——僕とこの子ですら、こんなにも認識が食い違っているのだから。

だから分かろうなんてせずに、納得のしやすい理屈ストーリーを組み立てて、それを現実の近似値とすれば良いのだ。

正解を求める必要なんて無い。

誰にも理解出来ない存在は、近似値でしか語ることはできないの

だ。

——その後も女の子は何かに追い詰められるように切迫した表情でAI統合体の統治システムについて思いの丈を披露していたが……僕はもはや聞いてはいなかった。

彼女はどうかやら僕のクラスメイトだから、その考え方、感じ方は尊重する。

尊重するから、それを聞かない。

聞いてしまえば衝突する。彼女の存在が、肯定と否定の二分項に分離する。そのどちらかを選択しなくてはいけないのが、どうしようもなく嫌だった。

僕は、僕にこうして声を掛けてくれた女の子を嫌いになりたくなかったのだ。

そうやって……ファストフード店の本当の使用用途——ファストからかけ離れた「時間潰し」^{スロウタイム}に舞い戻って、味のしない珈琲を口に運びながら窓の外を眺めていた僕の視界に——一筋の光がよぎった。

商店街のそれほど高くないビルに切り取られた、横に細長く伸びる雲だらけの夜空。

その雲の下を、光の粒子を振りまきながら流れる^{ほうきばし}箒星。

それを認識した瞬間——僕の足が、腕が、胴が、内臓が、頭が、チリチリと痺れ始めた。五感全てが刺激される。心の奥底から、自分では制御しようもないドス黒い感情が喉元へと溢れかえる。

（——アレヲ喰ライタイ）

（——犯シ、蹂躪シ、踏ミ散ラシ、食イ荒ラシ、咀嚼シ、殺シ尽クシタイ）

……それは、僕の短い人生の中で感じた、最も巨大な希求感だった。

僕に足りないもの、今の僕が必要としているもの、僕がこれからも僕として在り続けるために大切なもの……。

「それ」がそうなのだと、僕は瞬く間に理解した。完全に、把握した。

次の瞬間、僕は席を蹴って走り出していた。後ろから呼び掛ける女の子の声も届かない。置きっぱなしの荷物も気にはならない。

ただひたすらに、天翔ける彗星の至る場所へと辿り着きたかった。そして、それを徹底的に喰らい尽くしたかった。これまで――幾度と無くそうしてきたように。

ただひたすらに切迫した思いを抱えて、僕は冷え切った冬の街を走る。寒さを感じない。

彗星が向かう先は、都市を取り囲む巨大な外郭壁の一角。都市基幹部からはみ出した非登録民や違法移住民がスラムを形成する、外郭地区。^{アウトウォール}

その風景を黒く切り取る悪夢のようなシルエットに向けて、僕は精一杯に地面を蹴る。

ただひたすらに、獣のような気持ちを抱えて。

――今から思えば、それが僕と彼女……愛しき魔法使いとの出会いだっただ。

— 2 —

門田が査定開始の指示を送ると同時に、その視界が一気に拡張した。

これまで薄汚く安っぽい連れ込み宿の一室でしかなかった空間は前後左右の壁が四方10メートルにまで拡張され、置かれていたベッドや、安酒と未使用の避妊具^{コンドーム}の載ったサイドテーブル、部屋付きのシャワースペースや、靴に張り付くりノリウム張りの床に横たわ

るマリア自身に大量のタグが貼りつけられていく。

壁の打ちっぱなしにされた自己修復素材のナノ・コンクリートはすっかりと中央の制御を離れて暴走増殖し始めており、膨れ上がった奇妙な遠近感パースペクティブを醸し出している。

門田の隣には先程から会話していた部下、広尾ひろおがいつもの飄然とした長身をスーツに包んで佇んでおり、何やら言いたげな表情で角田に視線を向けていた。

——どうせ生身でこうして現場を訪れることに対して言いたい事でもあるのだろうが、「戦後」世代のこの手の若造と意見の摺り合わせをするつもりはもはやない。

或いは、何度注意されても止める気配のない煙草に対しての嫌悪感だろうか。

煙草はもはや非常識として糾弾されてもおかしくはない、反社会的行為このあたりスレスレの嗜好品だが、絶滅するほどには至っていない。むしろ外郭地区このあたりでは酒と女に並んでメジャーな「娯楽品」だ。或いは本部の管理職に回ってもおかしくないキャリアの門田が現場に居座るのは——特に外郭地区スラムを担当にし続けているのは、煙草を気にせず吸えるということが大きいかも知れない。

なんにせよ、門田はもう誰にも自分の生き方に対して文句を付けさせる気はない。

沈黙を保ち自分の視線をかたくなに拒絶する門田の態度に広尾が小さくため息を付く間にも、部屋中のナノマシンを義視化した機械仕掛けのマニピュレーターは触診するようにベタベタとあちこちをマーキングし、その度に指紋データやマリアと「客」から滴り落ちた体液浸透の状態がカラフルに色分けされて門田の視野に追加される。

10メートル四方に拡張された部屋の中に現れたのは広尾だけではかった。マニピュレーターの表示するデータをデジタルスレートに写し取っていく白衣・マスク姿（を模した）の監察官数名や、マリアの周りに群がる各局の立ち会い人であるスーツ姿の男たち。

静まり返っていた室内は、それぞれが好き勝手に口にする報告やら非難やら要請やらデータの送受信音で溢れかえっており、場末の居酒屋の如き様相を呈している。

実際、各局を代表するエリート様であるスーツの男たちにとっては娼婦マリアの猥雑な死体など居酒屋で口にする卑猥な冗談程度のものでしか無いのだろう。

そもそも、今この場にこうして映像化された様々な人達の内、実際に見た目と同じ姿をしているのは安っぽい吊るし売りのスーツを着た門田だけだ。他の人々は広尾のように本部のデスクでジーンズとグレーのパーカーをフードまで被ってふんぞり返っているのかも知れないし、トイレで用を足しながら見世物を楽しんでいるのかも知れない。或いは、それこそ日中から居酒屋（……いや、エリート様共の晩餐ならもつと上等なお店か？）にでも繰り出して酒のつまみとしてマリアの肢体を眺めているのかも知れない。

——これが、この時代の捜査というヤツだ。

殺人が起こればまずその部屋を極力現状保持とし、下請け業者がタンクに詰められたナノセンサーを噴霧し、後は各所にデータリンクされて、それぞれの代表者の監視のもとで調査・操作・査定が行われる。そして、その過程は操作の下請けを担当する市警と共有され、最終的なレポートが国家警察へと奏上される。門田の所属する生命保険相互会社は、さながら孫受けという訳だ。

一日に何十という案件を処理するためにはいちいち現場に出ていては体が幾つあっても足らないので、現場の方を自分のデスク周りに集積することで体を増やす事にしたという訳だ。

実に機能的で、捜査過程での誤解を生まない「お上品な」遣り方だ。

実際に現場に赴く懐古趣味な人間など、まず居ない。

保険の査定など、所詮はシステムだ。必要情報さえ集まるのなら専門人工知能（AI）に任せてしまっても問題はない。門田のように、全ての担当事件に生身の体で出かけていくようなロールこ

そ、博物館にでも行かないとお目にかかれない代物なのだ。

——門田とて情報化デジタライズされた現場を査定する方がどれほど効率が良く利便性があるかと言う事は重々承知している。生身で現場に立ち入ると言う事自体が重要な情報を欠損してしまうかも知れない、という事も。

しかし、刑事として8年、そして保険屋として5年、こうして現場第一の遣り方で過ごしてしまってきたからには、もはや現場で実際に感じる空気というものがその捜査・査定における第一次情報として必要不可欠なものになっているのだ。34歳という年齢は、何かを始めるのに遅い年齢ではないが、門田にはもう新しいやり方にチャレンジする気力は残っていなかった。

それでいて門田が主査として職務を全うできているのは、偏ひとへに年齢に比例した経験が持つ情報の説得力と、考査を行われる人たちにも生身の接触を好むロートルが多い為だろう。

どちらにせよ、成果が上がる間は門田は自分の遣り方を変えるつもりはない。そして成果が上がらなくなったら、引退するまでだ。

新しいやり方を否定する気はないが古い遣り方も非難はさせない。それに、門田の遣り方を非難する権利を持っているのは部下である広尾たちではなく上司である考査部の部長だ。そして今の所、部長は門田の遣り方を黙認してくれている。

もはや門田は刑事ではない。民事不介入の原則から解き放たれた保険屋の査定担当官はある意味警察よりも深い闇に触れる事も出来るが、それは権力によってではなく「金」カネという契約を介在して行われる相互干渉だ。

——同じ犬でも、死体の漁り方ぐらいいは選り好みをして罰は当たらないだろう。

「えー、被害者は木村綾子32歳、独身。綾部市外殻地区アウトウオール、住人による通称、末広町在住の性風俗業勤務で国家戸籍未詳。社会保障未加入。自己認証は風俗営業組合の会員登録で賄ってるみたいですね」
感情の籠らない事務的な広尾の声が何処か虚ろに届く。

「そういう意味では一応流しじゃなくて届出の出てる『個人マッサージ師』って事になってます。保険は組合の強制加入で分類はDカテゴリーですから、まあ気休め程度のもんです。死亡時刻は今現在から45分前、客とのトラブルでしょうね。死因は頸部損傷による失血死。血液中に薬物反応が若干見られますが、違法麻薬の類ではなく睡眠導入剤等の合法向精神性薬物。要するに、ごく一般的なスラムの国のお姫様ってトコですが……門田さん、聞いてます？」

「ああ、聞いているよ」

広尾の胡乱うろうんな表情に、仏頂面のまま門田は頷いた。

聞いてはいるが、聞かなくてもそんな事は一瞥するだけで解ることだ。

大切なのはマリアが何故死んだかではない。

どうやって殺されたかでもない。

「殺されなかった場合に一体マリアはどのような人生を送ったのか」だ。

被害者と犯人の過去を探るのが警察の仕事なら、被害者のあり得たかも知れない未来を査定するのが保険屋の仕事だ。死に至った原因を突き止めるのが警察の仕事で、死後の利得ゲインを追求するのが保険屋の仕事。それはとても基本的な事なのだが、警察の代行としてこうして捜査を行うことが当たり前になっている若い連中にとっては、その辺りがどうにも曖昧になる傾向がある。

もちろんこの初動捜査が警察の捜査資料として正式に（法的に）取り扱われる以上、手抜きをして良いはずはなかったが——心底、今の門田にとってはどうでも良い事だった。

門田にとって重要なのは、マリアのこれからの人生は一体どれぐらいの価値を持っていたのかという事と、その損害請求を誰に支払わせれば良いのかという事だけ。価値判定は本社がシステムティックに弾き出すので、そこに門田が付け入る余地はほぼ無い。

なので、結論として門田の興味主体は損害請求を送りつける相手を——犯人を見つけ出すことだけだ。

「―――広尾、これもまた『アイツ』の仕業だと思うか？」

「蓋然性100%で間違いないです。なにせ、体液の成分分析が一致しましたから」

だったらさっさと見えよ、と言う台詞は飲み込んで、門田は視界の隅に表示された分析結果レポートを一瞥する。

ベッド、及びマリアの膣内から採取された精液の照合結果、事件ケース
46082312及び46091509及び46102305及び
46111704と合致。一部不完全合致件数18件。連続婦女暴
行殺人犯、通称“切り裂きジャックジャック・ザ・リッパー”と推定される――

……俗な名前だ、と門田は唾を吐き捨てるのを辛うじて抑えこむ。
どうにも昔から娼婦を連続で殺害する人間には押し並べてこの名前が与えられるお約束になってしまっているが、何を表すでもない意味のない名称だ。

名前と言うよりも分類カテゴリーのような物なのだろう。

―――半径5キロの円形人工島に作られた洋上多層複合都市、綾部市。その最外郭部にあり、海風を防ぐ防壁の役目も果たすスラム街の一角で、おおよそ三ヶ月前から娼婦が連続で殺害されると言う事件が発生していた。

手口はいつも同じく、娼婦を安宿に連れ込んだ後で事に及び、終わった後喉をメス（のような形状の金属）で一文字に切り裂いて殺す。独創性こそ無いが、メインディッシュを食べ終わった後でデザートを召し上がるが如く、既定の行動を淡々と繰り返す実に職人的な殺しだ。

婦女暴行殺人犯の内、死亡時の痙攣を「楽しむ」為に殺す者は多いが、ジャックの場合は事が済んで「暫くして」から殺人に及んでいる。では暴行の事実を「消す」為に最大の証言者である女性を殺すのかと言えば、ジャックの相手は娼婦だ、訴えられる恐れはない。金が無かったのかと言うと被害者の私物や財布には一切手はつけ

ておらず、宿代も大人しく払って消えている（そもそも、後述の理由からジャックが貧乏であるという線は消えている）。

女と姦^ヤり、女を殺す。

そこまでが一連のディナーコースになっているとしか考えられない、殺す事自体が目的の悦楽殺人犯だ。それも殺しに殺したり、三ヶ月で22人である。

監視・鑑識・捜査システムが充足した現代において成立する犯罪ではない。最初の一件で直ぐに追跡^{トレース}されて逮捕される。

その上、殆どの事件で安宿の主が「副業として」仕掛けていた隠しカメラにバッチリその姿が映し出されているのだ（幾つかの殺人はリアルな殺人映像^{スナッフフィルム}としてその手の「好事家」の間で高値で遣り取りされていると聞く）。

連続殺人に発展する余地など無い。事件発生から遅くでも三時間後には解決だろう。

——だが、現実はそうっていない。

ジャックは最初の事件発生から三ヶ月、悠々と中部州警察^{シユウケイ}・綾部^{シテイ}市警^{ボリス}・保険会社^{コレギウム}査定部^{など}等の調査機関の手を逃れ続け、食後のデザートを召し上がり続けているのだ。

その理由はたった一つ。

犯人の容姿・背格好を始めとするプロフィール——つまり、目撃証言、映像に残る容貌・背丈、事件現場の痕跡から弾き出される癖^{クセ}等が、事件の度に変化しているのである。

最初こそ映像にハッキングを仕掛け自らの姿を改変しているのかとも思われたが、目撃者の硬電脳に直接記録された視覚情報までは弄れまい。

普通に考えれば、同一手口による複数犯の犯行と言う事になるだろう。しかし、その行動パターンや凶器の形状はいつも同じであり、何より女性の体内から発見されるDNAが「ほぼ」一致するのだ。つまり、ジャックは犯行の度に外見を「彫刻」し直している。

しかも、整形手術レベルではなく骨格レベルで。

或いは外見の異なる「全身義体」を換装しているという可能性もあるが、生体成人男性と全身義体の重量差は誤魔化せるものではない。エレベーターや各種センサーに残された痕跡からその重量は生体のものであると断定されている。

自己同一性を犯罪の度に捨て去り別の身体を手に入れ続けながら、娼婦を犯し、殺し続ける連続殺人犯。

——完全に常軌を逸している。毎週別の人格に乗り換えるようなものだ。人の精神は外見を大きく逸脱してその同一性・連続性を保つことなど出来ない。それに、それを行う為の金銭がどれぐらいの規模か。少なくとも門田の給料で追いつくレベルではなく、市の中央商業区にビルが買えるレベルだろう。

更には事件を不可解なものにしている要素が、DNAの「一部不完全合致」である。

被害者女性から採取されたジャックのDNAは100%の一致を見ることもあったが、その数値が50%、或いは数%レベルにまで低下する事もあった。最初は何らかの損壊による不一致かと思われたが、遺伝子解析の結果「非常によく似た他人」のDNAである事が証明された。

つまりはジャックは単独犯ですら無く、DNAが似通った複数男性（恐らく兄弟を含む血縁関係者）によって構成される娼婦暴行殺人集団と言う事になり——、“ジャック”は“ジャッカス”だったのだ。

全22件の殺人から割り出した「ジャッカス」のメンバーは次の通り。

主犯格・ジャック。22件中10件を担当。容姿パターン7通り。
副犯格・ジャッキー。22件中6件を担当。容姿パターンは4通り。

従犯格1・ジャッコ。22件中4件を担当。容姿パターンは2通り。

従犯格2・ジャン。22件中2件を担当。容姿パターンは1通り。

この、DNA分類4パターン、容姿14パターンに及ぶ複合犯罪集団こそ、今巷を騒がせている連続娼婦暴行殺人犯“切り裂きジャッカス”なのである。

「……で、今回は誰だ」

門田の短い問いに、広尾がデータを転送してくる。

特徴のない20代後半の日本人と思しき全裸の男性がマリアと絡み合う映像が視界の隅に表示され、男の顔が隠しカメラに向いた瞬間に停止、拡大される。

「ジャッコです。容姿パターンは091509に類似、但し耳鼻の配置と顎骨の形状が少し異なっています。二週間ぶり5度目の登板ですね」

巫山戯た話だ。まったくもって現実的ではない。

どんなに真面目な話題の時も軽口を叩かないと気が済まないのは広尾の悪い癖だが、ジャッカスの犯罪を野球に例えたその気持ちは分からないでもない。

門田がジャッカスの殺しを「職人的」だと感じているのと同じように、広尾もジャッカスを定期的に職分としてマウンドに上がる生真面目な投手のように感じているのだろう。広尾は自分の職分に対して真面目になりきれない部分が多々あるが、そうであるだけに何処か冷めたその視線は客観性を帯びており、軽口が本質を突いている事も多い。要領も悪くはない。

そう言う広尾の言動を、疎ましくなることはあるにせよ軽視するつもりはなかった。

「宿の管理者の証言は」

「いつも通りですよ。女と一緒に特徴のない男がやってきて、前金を払って、ヤッてから後金払って先に出ていった。女が出て来ないので部屋に乗り込んだら死んでいた。そして、『たまたま偶然』録画していた『防犯映像』を再生してみたらバッチリ殺害の瞬間が録

れていた。……そろそろ揚げ^ア立てホヤホヤの新鮮スナッフがアン
グラに入荷する頃じゃないかと」

広尾の台詞に合わせて、門田の視界に押収された映像が再生され
る。

一戦終えた後らしいジャッカスがマリアを背中から抱きすくめる
ようにして何かを耳元に囁きかけ、マリアがくすぐったそうに薄笑
みを浮かべながら首を横に振る。マリアの髪に顔をうずめながらジ
ャッカスは散乱していたジャケットの内ポケットからメスのような
細長い金属片を取り出し、何の躊躇いもなくマリアの頸を掻き切る。
その頸から赤色のナイトシェードでより一層紅に染まった鮮血が
迸り、シーツを握り締めながらマリアは不思議そうな表情を浮かべ
つつベッドから転がり落ちる。

やがて小刻みに痙攣し始めるマリアになど一瞥もくれずジャッカ
スは身だしなみを整え、淫らな死体と化したマリアの唇に軽いキス
をすると、ごく平然と部屋から出ていく――

「……音声は。何を話していたか解るか」

「録音はされてますが、音量が小さいみたいで正確な所はまだ。一
応唇^{リップ}の動きと合わせて解析の要請はしてますが、オペレーター^{リス}の順
番が回ってくるのは後になりそうですね。ああ、プレイメイトでも
気取ってたのかオーイエースな感じのアメリカンファックの声は入
ってますけど……聞きます?」

「聞かねえよ、ボケ」

――全くもって今まで通りだ。

これが通常の事件ならもうすでに解決してる。殺人の証拠映像は
あり、犯人の顔は写っていて、物証はマリアの体内に残されている。
だから、門田は映像の中で虚空を見上げるマリアから、現実^{リア}に横
たわるマリアに視線を移して小さく舌を打ち鳴らした。いつもと同
じという事は、この映像を手がかりにジャッカスを追い詰めよう
にもいつも通り消息不明で手詰まりになるだけだろう。

広尾の事だ、この映像を手に入れた直後に関係各省に顔写真を回

して市街監視システムや各所ローカルウェブカメラの交通状況映像の常時照合を要請しているだろうが、それでジャックカスの足取りを追えた試しはない。

——いや、何時いつもある程度は追えるのだ。安宿から出て、通りを進み、次の角を曲がるぐらいのところまでは。しかし、社会基盤ソーシャルベース、公認、個人を問わず街角の至る所に設置された常設カメラ網のほんの一瞬でも死角に入った瞬間、その足取りは途絶えてしまう。

幾ら何でもそこまで早業での変装は不可能と考えられる為、ジャックカスはセキュリティの弱いカメラを把握してクラッキングし、その映像をリアルタイムで変更しているのだろうと推察されている。面倒な相手だ。

裕福な資産を有し、ある程度のハッキング能力を持ち、複数でローテーションを組んで悦楽殺人を愉しむ連続殺人犯。映像を残すのも、捜査当局に対する愉快犯的な側面があるのだろう。

それほどまでに金ツアーチャルが有り余っているのならば、非合法の生成義体バイオロイドを飼ひ込むなり仮想現実ヴァーチャルで思う存分性欲と殺人衝動を満たすなりすれば良いようなものの、敢えてこうして現実の殺人に手を染める——。

それはジャックカスの歪んだエリート意識と男根主義マチズモに根ざした優越感、そして強烈な自己顕示欲の発露だと分析されているが——それは多分本質ではない、と門田は思う。

門田にはどうにも……ジャックカスが鏡に写った自分のように感じられるのだ。

何故だかは分からない。自分の事すら明確に規定できない門田にとって、連続殺人犯が何故なぜ自分と似通って見えるのかということを説明することなど出来ない。強いて言えば、長年の経験が創発エマージェンスした勘とでも言うべきだろう。

その門田の勘が警告している。

——各局がジャックカスに貼りつけたプロフィールは本質を指すものではなく、あくまで行動結果に依るものでしか無く、その殺人

は悦楽とは別の理由によって行われているのではないか。

——これはジャッカスなりの警句なのではないか。

……この三ヶ月、幾度と無く娼婦たちの死に様を査定してきた門田には、陳列棚に並ぶ大量生産品の様に同じ傷口と肢体シタイを晒す娼婦たちの瞳の奥から、ジャッカスが語りかけてくるように感じる瞬間が有った。

「大量生産消費物に均しい非登録住民の娼婦の捜査など、公的機関が本気で取り組む訳はない——。そもそもお前たちの生と死になど意味はない。それは統計数字として把握され、金銭数値に置き換えられて消えるだけの紛い物だ。しかし意味はないが、価値はある。俺はそれを浮き彫りにしているだけだ」と。

その感覚は誰にも話した事はない。話す訳にもいかない。

一笑に伏せられるならまだしも、さもすると心療内科送りになりかねない。

特に、一流の大学を出て順風満帆に綾部市生命保険相互会社に入社し、花形である査定部に配属された高給取りの広尾などには理解できまい。

門田は自分が狂ってしまったとは思わない。事件を追う刑事が追われる犯人の行動と向き合い続けた結果、その声なき声が聞こえてきたり思考がトレースされるようになったりするのは、良くある話だ。

極論すると、追う者とは追われる者にどこまで成りきれるのかという事が重要なのだ。狩人と獲物に発生する共感シンパシイ——。

だから、事件現場に残されたジャッカスの（ある種の）残留思念ゴーストと対話出来た時、門田は悟った。

ジャッカスもまた、門田と同じように「何か」に乾いた存在なのだ。

恐らく、ジャッカスは殺す事が目的なのではない。

殺した後で立ち現れる現実——つまり、その個人が存在しなくなることによって生じる「欠損」を眺める事こそが目的なのだ。

——それは「ありえたもの存在の仮定」に対して値段を付ける門田の行為と紙一重でしか無い。

そうしてその上でジャッカスは「自分の外見以外の全ての情報」をそのままに残し、捜査関係者を挑発し続ける。

（——さあ、どうだ？俺を捕まえられるか？俺を商品棚に陳列できるか？そして犯罪者としての俺の存在を消すことが出来るか……？）

門田にはその気持ちが……理解できる。

今の自分自身の存在に価値を付けることなどできないが、居なくなってしまう自分の不在が……そこに残された「欠落と言う存在」が損失としての値段Ⅱ価値を与えてくれるのではないかという、漠然とした希望……。

「……お前も結局、自分の存在イマよりも非存在ミライに価値を見出したがっているのか？」

ジャッカスに対する自分自身の態度も明確には決めかねたまま、門田は誰に聞かせるでもなく、理解されるはずのない言葉を口にした。

隣で佇む広尾が明確に聞き取れるほどの声量ではない。聞かれたとしても理解など出来ないだろう。そもそも、理解されることを目的として発せられた台詞でもない。

それは自分の心の中に棲まわせたジャッカスとの対話の中で生まれた、独り言だ。

しかし——

「それは正しく間違っているけど、そうであるが故に間違いなく正しいわ」

——乾いた冬空に解き放った清廉な鈴のような声が、部屋の隅々までを凜リンと震わせた。

「!？」

全く意図しない所からもたらされた返答に、門田は弾かれたように後ろを振り返った。

いつの間にか——全く何の気配も感じさせずに、小さなシルエツトが部屋の入口に出現していた。

最初、それは闇から染み出た薄ボンヤリとした生首のように見えた。

驚愕に見開かれた門田の目が徐々に暗がり慣れてくるにつれ、それは次第に人の形を取り始め、やがては仄暗い廊下を背にして立つ、踝丈まである黒いマント状の外套を羽織った少女であると了解された。

そう……それは少女だった。

身の丈は150cm程、背筋は毅然と伸ばされ、まるで生気の感じられない端正な顔立ちに、腰まで伸ばされた銀色の髪の毛。真っ直ぐに門田を見据えるその双眸は光の具合で真紅とも茶色とも見えた。

まるで、人形のような少女だった。

「お前……いったい……」

安っぽい連れ込み宿には相応しくない——或いはとても似付かわしく感じられる耽美さと幼さを兼ね備えた美貌を誇示する少女に、門田の言葉が詰まる。

外郭地区は年頃の女子供が気軽に出入りして良いような場所ではない。この安宿も男女がその欲望を吐き出すために使われるような場所だ。こんな作り物めいた容姿を^{あらわ}顕にして入り込んだら、数分と立たず獣欲の餌食になってしまうこと請け合いだ。

それに——今この安宿は査定のために立入禁止になっている。入ろうとするものが居たならば、即座に門田に連絡が回ってくる筈なのだ。

「主査^{チーフ}?」

隣に立つ広尾が、昼間に幽霊でも見たかのように蒼白に染まった門田の顔を覗き込んでくる。

「どうしたんです？何か気がついたことでも？」

「ど、どうしたってお前……」

変わらぬ居住まいを保つ広尾から無理やり視線を引き剥がして再び少女へと目をやると、門田の存在などまるで無視した透徹とした足取りで少女はマリアの方へと歩を進めていた。

「お、おい！ちょっと待て、そこのお前！」

慌てて呼び止める門田を、今度こそ広尾は不審おもてそうな態度を表にする。

「主査チーフどうしたって言うんですか？なにか見えるんですか？」

「何かって、お前……」

まるで自分一人だけが出来の悪い現実に放り込まれてしまったかのように、門田は少女を指さしながら広尾に向けて大音声を発した。「こいつが見えないのか！？」

——不意に、沈黙が室内を支配した。

広尾を始めとして、鑑識官や各局代表たちが、狂人でも見るような眼で門田を見据えていた。その視線に籠るのは、紛れもない猜疑心と、理解不能なものに対する仄かな恐怖心——

やがて、凍りついた空気を溶かすように、広尾が門田の指先を視線で辿りながらおずおずと口を開く。

「な、何って……被害者女性でしょ？」

（……見えて……ない）

門田は確信する。

広尾たちには少女が見えていない。

確かに門田の指差す先にはマリアの死体が転がっている。しかし、今の文脈では門田が指すのが死体ではなく、その横に佇む存在感の希薄な少女なのは確実だ。

全身から脂汗が滲み出るのを自覚しながら、門田は少女に向き直る。

「俺に——ハッキングしたのか？」

そうとしか考えられない。この部屋は今、コレギウム生命保険相互会社の管

轄下にある。ソーシャルな視覚層^{レイヤー}に侵入する事は可能だとしても、その場合視認情報は共有化される。そうではなく門田にのみ見えているということは、門田の視覚野ではなく、認識に直接ハッキングを仕掛けているということになる。

個人硬電脳の認識野への侵入^{ハッキング}……それは紛れも無く第一級電腦倫理侵害の重犯罪である。

自らの認識世界にハッキングされると言う事は、生命を握られたに等しい。いつでも門田を発狂させることが出来るだろうし、姿を消して刺し殺すことだって可能なのだ。

自らが窮地に追い込まれていることを自覚し、息苦しさすら感じながら得体のしれない少女を見据える門田に、再び澄み渡った声が届いた。

「——これはハッキングではないわ、門田担当官。ハッキングと言うのがとあるシステムに対する外部からの悪意的侵入だと定義するならば、私は今どこにもハッキングしていない。何故なら、あなた達が現在使用しているシステム自体がすでに私を含む上位システムの一部なのだから」

「何を——言ってる。なんで俺の名前を知っている！」

「そうね……言を凝らすよりもまずは認知せよ、という事かしら」少女はほんの少し肩を揺らすと、マントから細い腕輪やチェーンのまわりついた右腕を出すと、パチン、と指を鳴らした。

次の瞬間——門田が視認していた一切の仮層^{レイヤー}が消滅した。広尾も、鑑識官も、スーツの男たちも、部屋中に貼られたタグも。部屋は一瞬にして元の息苦しさを覚える狭いレンタルルームに収縮し、それでも——少女はまだそこに居た。マリアの血塗られた死体と共に。

今度こそ本格的に息を飲んで呼吸を忘れる門田を、少女はふわり、と振り返る。

「私は現実物理体よ。貴方の電腦にハッキングしたのではなく、貴女がいる部屋に侵入^{ハック}しただけ」

「そんな——いや、まさか……」

有り得ない。

いや少女が部屋に侵入してきた事がではなく、部屋に侵入しながら広尾たちに認識されなかったと言う事がだ。

この部屋には今ナノセンサーで充填されている。僅かな空気の動きも、そこに存在するありとあらゆる物の物理形状や色彩もデータとして送信し、映像化する。空間そのものがセンサーなのだ。

しかも、ナノセンサーは中央集権された中心を持たず、全てが個別に微細電波を放出する。それら全てを誤魔化すなんて、何億とも知れぬナノセンサー全てに同時ハッキングを仕掛けなくてはいい。人間には不可能だ。

（人間には——？）

その時門田は、一つの可能性に思い至った。

少女のこの奇態な雰囲気、非現実的な状況、そして何よりその人形のような容姿……。

「……気が付いたみたいね」

少女の薔薇色の唇がニッと釣り上がって微笑みを浮かべる。

さも、不出来な生徒がアドバイスの末にようやく正解にたどり着いた時の教師のように。

「お前……まさか魔法使いか!？」

——噂には聞いたことがある。

フラクサス

ノーマライズ

AI統合体が変性時空間の平常化と特務の為に創り出した、特殊

人類。AI統合体

フラクサス

の得体の知れぬ計画の元に、完全義体化された身

体と人類を超越した能力を駆使する、機械の子供たち。

フラクサス

マシナイズチャイルド

AI統合体の超越的な演算能力をその背景に、現実物理法則を超えて時空間場へ直接干渉する事を許された、超常の存在。

通称——魔法使い（ウィザード）。

たった一人で星すらも砕くと言われる彼ら、彼女らの存在はネットや現実を問わず真しやかに語られ、AI統合体自身もその存在を認めてはいるが、公的資料には記録されていない。記録されないの

だ。

この常人離れした雰囲気醸し出す少女が、その生ける伝説とも言える魔法使いだと言うのか？

「――あら、失礼ね。私達は別に魔法使いなんて言う前時代的な神秘能力者じゃないわ」

だがしかし、少女自身が門田の問いかけを否定した。

そうしてバサリとマントを跳ね上げると、その下に隠れていたゴシックなドレスとタイトスーツの中間のような黒い衣装に包まれた^{しな}、
靱やかな肢体を顕にして、その腰に左手を当てながら見かけの割には豊かな胸を張って自己を顕示してみせた。

右手は門田に向けて掲げられ、その甲には深海魚を意匠化されたと思しき虹色の輝きを放つ3次元ホログラフィックなロゴが刻印されている。そして、そのロゴの下に示されている「 $\alpha \cdot \phi \cdot l$ 」の三文字と、ギリシャ数字のⅠⅠⅠ。^{スリー}

「我々は人類を『禍』^{スカージ}の脅威より守護すべく、上位知性体より任を授けられし者。現実空間構造を侵食する変性時空間、^{クラウンドゼロ}及び不可侵領域を平常化する為に創出られた人型干渉機^{ヒューマノイドインターフェイス}――」

少女の口元から白い歯が覗き――花の様な笑みを咲かせた。

「――上位知性体典範教導院直属、特殊機体運用課第三班班長の^{フラクサス}
^{メイガリソスファイア}
^{バスカチーフ}
^{テルツァスクワチーフ}
^{あいざわかれん}
有比澤華恋よ。……よろしくね、門田担当官」

【続く】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3010z/>

Hello,World.

2011年12月10日18時57分発行